

解説

草木染(くさきぞめ)

この手織抄に貼附した裂は、すべて傳承の植物染料による染色——著者が命名した「草木染」によつたもので、染材は藍をはじめ、紫草、紅花、茜、蘇芳等二十余种であつた。

必然、その底深い天然的美しさは、素朴な手紡、手織の技法と共に真に静かなる微笑を示している。

手織

これは著者の指導の下に、地機(ちばた)の佐藤つなを主任にして、その大部を月明工房で制作した。尚、その一部は茨城、越後、薩摩、また信濃の月明会員の手にも紡がれ、織られた。すべて著者にあつて染織の一切を指導したものである。

手織も、純粹なものはすでに甚だ妙い。

地機(ちばた)

地ばた、一名、蹠機(いざりばた)と言はれるもの、地面に足を投出した形で織るからで、また悪口に、乞食ばたともいふ。いま月明工房で使用しているものは凡そ二百年以前のもの、この織手佐藤つな女はすでに七十余歳、織歴五十五年である。

この場合、機は人体を主体とするので、却つて機具は補助機関のやうでさへある。——糸に無理がかゝらず、自在に伸びて、この結合は縁辺をまで美しくしている。

材料糸

こゝに抄成した手織裂の原材糸は、すべて手作、手紡のもので、真綿から引出した真綿糸、又は繭から直接引出した手紬糸をはじめ、玉繭から坐繰した「玉糸」、上級絹糸をより合せた「絹糸」等各項に説明してあるが、尚、天蚕の白、また柞蚕の白茶も手紬したし、綿糸も古法による手紬ぎのものを制作使用した。

玉糸(たまいと)

玉繭(たままゆ)を、座繰してつくつた糸である。

玉繭は、「ふたつまい」とも言はれるように二疋の蚕が一緒になつて一つの繭をつくつたもの、普通の繭形のようにではなく、厚く、丸いものなのでたまと言はれたのであろう。従つて節(ふし)が多く出るのでこれを欠点としたが、今日では却つて節を趣ありとし、またこの糸質の強靱さを賞してゐる。本抄には特にこの糸を採上げ、なるべく多くのものに使用した。

名称について

縞、柄の名称は、傳承されたものを多く抄出した關係から、民間に呼び慣らされたものを採上げた。石ずり、くずし、よるけ、よこだん、よせ縞等々、その技法に係るものがあり、八丈、琉球、丹波等の初出の地名によるもの、弁慶、ヘタガスリ等のユウモアもある。

順序

配列の順序はむづかしかつたが、發達の順序をも考へて、大体、無地織から、縞ものに行き、一転、弁慶(べんけい)柄にとび、そこから横段に帰つた、かくて格子(こおし)に赴き、更に変り織に行き、遂にかすりに至つた。そこにはまた綾織もあつたのである。計二十六種、まことに尽しがたい。

再造

これ等の裂は、本書のために新に制作したものであり、勿論再造は可能である。しかし、この染色はすべて自然の所産するものであり、材料の類も天然のものなので、その造出の結果には多少の差異を生ずるので当然である。

そこに却つて、そのものゝ特殊があり、色相に於ても、草木染によるものは自然科学的变化に因て、将来に却つてその美を發揮するのであり、これを褪色と見るのは当らない。

本造

本書用紙はすべて純手漉の和紙——月明紙の二枚合せて、見返しも同じく、その漉色の「くさきぞめ」である。口繪は「地ばた織図」作者は版画家、平塚運一、手刷は刷師、吉田竹三郎。

装幀用布は藍の「まんすじ」の手織紬布、題名は純金箔押、外函用布には藍のもめん手織布を使用した。

尚、カットは染材を描いたもの。但し月草は、昔日、摺染(すりぞめ)の藍色であり、わたと麻は糸材である。筆者は画家、山崎青樹。また、すべての英訳は山本雪。

手に従つたもの

手織 佐藤つな、工藤節子、宮沢かねを、加藤みつ。染色 山崎斌、豊、工藤節子、赤沢純一郎(紫草栽培)、佐藤八兵衛(紅花栽培、紅餅作製)市村光(藍栽培、藍建)。製紙 月明手工芸指導所山崎青樹、広岡七男。印刷 ミツバ印刷、笹崎誠治、原政夫。製本 上田東作。事務 山崎順。尚、材料、燃糸その他に農林省横浜生糸検査所、神奈川県織物指導所、長野県織維工業試験場等の好意を享けた。

まんすじ (万筋)

まんすじ——字引には「二本づゝ色のちがった縦糸を配列した細い縦縞」とある。

こゝにはまづ、立糸を染めて立縞を織ったのであらう。——縞作りには、鳥の羽の色の序列が参考された。いまも、その糸数をかぞえるのに「一羽(ひとは)二羽(ふたは)」といふ。

万筋は一羽、一羽の縞立である。立の一羽は紺(アイ)で染め、一羽は白糸のまゝ。横は藍又は藍下山漆の黒、糸は手紡のもめん。



やまうるし

YAMAURUSHI

The cover material

Mansuji

Mansuji is described in the dictionary as "thin stripe pattern using two threads each of alternately different colors in the warp." In other words, the warp threads are dyed and woven in to produce a vertical stripe pattern.

In the weaving of stripes, consideration was given to the manner in which shades of color to be found in the feathers of a bird's wing. Consequently even today the threads in such a pattern are counted as "hitoha" (one feather), "futaha" (two feathers) etc.

Mansuji is a "hitoha-hitoha" stripe pattern. One hitoha in the warp is of Ai indigo, the other plain white. The woof is Ai indigo or black of Yama-urushi over indigo. The thread is hand-spun cotton.



地 織 図

平塚運一作(版画)

IZARI-BATA TEORI NO ZU

"Ground-loom" (ji-bata) or "Cripple's loom" (Izari-bata),
is a type of hand loom.

Wood block print by Unichi Hiratuka.

序のことば

先に「草木染百色鑑」を刊行した私は、いまこれに継ぎ、草木染の手織に求めて、その二十六種を抄出、新たに製織して「草木染手織抄」の造成に従った。

「むかし、手織した人々の手元には「縞手本」（しまでほん）といふのがあった。テキストブックであり、手鑑であり、また自からが織らうとするものゝ手控でもあった。遙かに、故人―母達が所持したその縞手本を偲びつゝおもふ処は、この染織の一途にも盡心した古人の願求の深さと、厚さである。

機織（はたおり）の歴史もまことに古く遠い。前著の序にも述べたが、既に奈良朝（六四五―七九二）には海外の豪華をも容れて発展し、これを享けて中世にいよいよ爛熟したのであるが、明治中葉、所謂染色革命に遭遇して、相共に衰滅の道を辿り、遂に「機具（はたこ）と年寄りの置場に困る」といふに到ったのである。

経験を棄てる処に伝承は無い。かくて手織の機具も風呂の下に焚かれ、手織の技を持つことをさへ恥とした。

昭和四年（一九二九）当時の実情である。

私がそこに手織の復興を所願しはじめたことは、同時に「草木染」の復活に行動することであった。爾来三十余年、尚、或は時運に逆行するものとも眺められながら、この古き道標に随行して来たのである。

いま、この布片の抄出にも、その心を以てしたのである。これは決して懐古ではなかった。敢て言ふ温古であり、知新といふよりは更に「行新」でありたいと願つてのことであつた。

事實は、この手織の再現に見られたい。未だ至らざる遠きを勿論思ふものだが、古人の悦びを、茲には私共の喜びとする思ひであつた。尚、後来には曾ての、縞手本の一つをおくることにもなつたのである。

これ等の布片は、言つて見れば先人の欣求愉楽の詩、そのものでもあつた。これを抄し、説明を附するとしては、当にその「詩集」を綴るおもひでもある。この仕事をやって、仕合せだつたとおもふ。

昭和三十四年秋彼岸 鎌倉、極楽寺茜庵にて

山崎 斌

目次

序三 口絵地織図五 解説七 いろむじ九 むじもろつむぎ十一 いしずり十三 ひきそろ
し十五 ぼおじま十七 あかさんとめ十九 きはちじよお二十一 きぬとうざん二十三 りゆ
うきゆう二十五 べんけい二十七 よこだん二十九 とびはちじよお三十一 しがらみ三十三
たんば三十五 いろごおし三十七 にじゆうごおし三十九 つきよごおし四十一 かたはじま
四十三 こもちじま四十五 よせじま四十七 いちくずし四十九 にくずし五十一 よろけじま
五十三 やたらがすり五十五 さつまがすり五十七 おにあや五十九 まんすじ表紙

永遠版 限定式百部之

第

108

号

月 明 会 出版部

神奈川・柿生・月明峽

草木染手織抄

山崎

斌

The following pages contain images of the box in which the book is contained:

spine

front cover

front inside

back inside

草木染手織抄

**NIPPON HAND WEAVES
IN "KUSAKIZOME" DYES**

 IMPORTED FOR SALE BY
CHARLES E. TUTTLE CO.
RUTLAND, VT. & TOKYO, JAPAN

MADE IN JAPAN

